

ウバメガシとサルキン

田 中 兼 治

ウバメガシとムベは共に暖地の海岸性植物で、日本中南部の海岸から8~10km. 位まで自生しているのである。然し多可郡地方では海岸から50km. も離れた処に大群落があつて植物分布の上から見ても大驚異に値することである。この海岸植物2種について報告したいと思う。

1. ウバメガシ

ウバメガシは我国の硬葉樹の代表的なものとして、或は木炭として世界最硬の備長炭の材料であるので民間でも能く知られている、それ故、方言も多く、ウバメ、イママガシ、ウママガシ、イヌガシ、クロガシ、バベ等といわれ、本郡ではゼンゴメとかパノキと呼ばれている、そしてお正月の焚き初めには無くてはならぬ縁起のよい植物の一種である。

本植物は初島彦彦博士の調査では、日華両国に産し、中華では貴州、四川、湖北、福建、広東の諸省に知られ、日本と著しい隔離分布をしている、そして中華では内陸に限られているが、我国では逆に海浜植物として知られているのである。それに多可郡では相当な内陸に知られていて、分布を比較すると、面白い対比である。たゞ日本だけを見ると海岸で発生した植物と思えるが中華や本郡の例から推すと初島博士の説の様に内陸発生源のものであると云えよう。この植物が海辺から遠く離れた本郡に産することは嘗つて入海であつた時代の遺物であろうと考える学者もある。本郡の分布は西にのびて備前、津山にまで及んでいる。

我が国に於ける分布は東は伊豆半島で紀伊半島には木炭の材料にする程、饒産するので知られている。瀬戸内海には散在し、四国は南海岸に多い、九州では散在する程度で南限は屋久島に及んでいると云うことである。

本県の分布は、淡路では、中部の海岸に限られている。播磨では揖保郡、室津、印南郡大塩附近、多可郡比延庄村、加東郡朝光寺山に知られている、摂津では神戸市塩屋、舞子、奥妙法寺に知られ、但馬、丹波には自生を見ない、大塩附近並びに比延庄では可成り茂つた処があるが、郡内では加古川支流の畑谷川及び本流を境としてその西側にはなく東側で約200m. 以上の山の上に自生品がある、伝説によると、昔、弘法大師が、この種子を袋に入れて撒き廻つたがパノキの辻でとうとう種子が無くなつたから、ここから奥には1本も自生が無いのだと伝つている。又西脇町附近の伝

説では加東郡に昔、アマンシヤコ(天邪古)が住んでいて夜の中にパノキの種子を比延庄村までばらまいてやるといつて夕方から播きかけたが思つたより村が広すぎてとうとうパノキの辻で夜が明けたので残りの全部をこの辻に播いてしまつたのだとも云つている、この辻が本植物の方言にまで発展したのは面白い、こゝは多可郡比延庄村と加東郡鳴川村との境に当る処で、こゝより西域は西北に当る多可郡には無くて庭などに植えて珍らしがられているのは不思議である。

比延庄に如何に饒産するかは次の年中行事のあることで想像して貰えると思う。例えば大晦日の晩か、正月の焚き初めに、この木の枝葉でつくつた柴を用いるが、火を放つと枯れ葉が威勢よく音を立てて賑やかに燃えるのである、この音がぜにこめ一ぜにこめ(錢米)と聞えるといふ、或は又錢を蔵の中へ詰め込め、詰め込めと繰返すと聞えるともいふ、お目出度い音だと縁起を担ぐのである、つまり他の地方で大豆殻を乾燥させて置いて正月に焚き初めに音を立て、燃やし、まめ(元気になるの方言)になるとか、にぎやかに繁栄するとか、お目出度いことにかこつけるのと全く同じことである。

2. サルキン

ゼンゴメと同じ様な分布をする植物で果実が美味であるので人生との関係が深く、トキリアケビ、ウベ、マヌメビ、サルキン、パイ、などの異名がある、本州中南部、九州、琉球、台湾等の海に近い山に分布しているものであるが、海岸から遠い、多可郡にも広く分布しているのである、自生の場所は大体150m. 以上の山地で東又は東南、或は南向きの谷筋に多く乾燥する尾根には見当たらない、谷合いの灌木型の然かもクズ、アケビ、トコロ等の蔓草の纏綿とした何10疊敷もあろうかと思われる大藤棚式の手の届く様な棚を作つて茂つている、果実の大きさは楕円形で長径7cm、中央の周囲14cm、位で長い果梗の端に3ヶが相接して放射状につくか、2ヶが八字型につくか、1ヶだけつく場合もあつて一定して居らないが、10月末、深緑色に光沢の強い葉並の間に同じくピカピカと光沢のある紅紫色の果実が1目に100個近くもぶら下つているのは偉観である。特に1ヶ所から同大の果実が2ヶ八字状についているのは丁度、イヌノフグリの果実を想い起こすのである、しかも、その色が濃のしりだこの様に紅紫色

にピカピカ光っているのは、形、色、大きさから推して田舎人でなくても、さながら猿のフグりを想像させるのに難くない。それ故当地では早速、これに擬してサルキンと呼び、山民に親しまれている。

書物によつては果実が熟すると縦に裂開すると記載したものがあるがアケビと異り、裂開は決してしない、稀れに縦裂のように溝の出来ることがあるが、アケビの様な開き方では無い、皮の繊維も、そうはなっていない指先きで開け見ると中味はグチャグチャで、これも亦、アケビのようにバナナ式に纏つてはいない、味は甘くておいしいが、何分、種子が小さく、クロインゲン位で数が70~100粒もあつて殆ど種子ばかりと云つてもよい位である、口の中でこの種子の処置に困るのであるが、そのまゝ呑み込むと種子が消化管を素通りしてしまふ。それで食べたことは翌朝便所でよく判るのである。

ムベの語源については牧野先生の日本植物図鑑に詳しい当地方ではトクリアケビやムベでは一向通用せず形と色とからサルキンが一番ピツマリ来る名称である。又別にマヌズビとも呼ばれている。当地の伝説では、昔やぐざがばくちに負けて一物も無くしてしまい飢餓で山を通行中、たまたま、この果実を見附けて食べ、元気を回復して、又旅を続けることができたからマヌズビと云い出したと伝えている、果実の中は殆んど種子ばかりなので、果して、これ位で飢が凌げたか何うかは甚だ疑わしい。

なおこの植物は当地の民間薬として重宝がられているものである、即ち、蔓を乾燥して、後に煎汁を作り干菜ほしなど食塩を加えて風呂湯をつくり、温浴を繰返すと仙気や神経痛に特効がある、この湯に入ると一週間か、半月位で根治するといつている、併し、昔の交通不便の折、或る行商人が仙痛の爲に行商を中止

していた折、この蔓の薬効をきき、早速実験に仙気を治し再び旅に出たから、又旅と名附けたともいわれている。

丹波、多紀郡では、ムベの苗を鉢植に仕立て、七五三(シチゴサン)と称え、目出度い植物としていると聞いている、そのわけは小葉が7枚、5枚、3枚と別かれるからだといつているが山で自然の状態を見ると、3枚から7枚まで、色々で5枚のものが一番多いが、4枚も6枚も、勿論あつて、3、5、7枚に決つた事はない、併し園芸家が盆栽として意のままに葉の剪定をするなら、或は753に揃えることは容易なことである。又某種苗店の目録の中に七五三の苗として売出しているのを見ると、やはりこのムベの苗のようであるからチゴミサンの方言も随分広いのであろう。

和名マヌズビはサルナシ科の植物で牧野先生の日本植物図鑑によるとマヌズビの語源はアイヌ語のマヌズムブより出た言葉であると記されている、マヌズビの葉には香りと辛味とがあつて猫科の動物である虎や猫が嗅ぐと忽ち恍惚として誠に愉快そうになるという事である、その写真と記事が先年の朝日グラフにも出ていた事があつた。本種はムベとは全く異なる植物で何の縁もゆかりもない。

上記二種の植物は暖地の海岸性のものであるが、この北播の山上にまで分布しているのは、海の入込みと地質との関係と一つの連りのあろう事は疑う余地はない、ウバメガシの種子は水に流されて腐らなくても動物に喰われて消化されて了うし、ムベの種子は恐らく如何なる動物の消化器を通過しても消化しそうにない、それでムベの分布状態の方は海とは関係づけ難いと考えるが、然し双方を併せて考えると、随分興味のあつた問題である。従つて更に詳しく調査して再度報告したい。 Oct. 1951

杉本 順一 著 植 物 検 索 誌

著者杉本順一氏は日本樹木検索表三省堂発行の大著で御承知の御事と存じます。同書は既に絶版となつて時に古本屋に出ましても3000円もしています。この度著者は更に草本、羊歯を加え、日本の総ての植物の検索誌を公にしつゝあります。我々生物教師の血となり肉となる本當に身につくよい書物であることを皆様に御薦め致します。

本書の四大特長

1. 日本自生の全種と渡来種の多数集録。
2. 検索の正確と平易。著者自ら採集又は栽培して比較した。

3. 産地の詳記と正確。分布を詳記せるものは他にありません。

4. 最新の正確学名列記、植物名彙の代りとなります。

B6版 170頁 良質紙使用300部限定版

目下第二巻が印刷中でありまして、1、2巻御注文の方に限り、800円(送料共)にして下さる由です。御希望の方は直接同先生宛申し込んで下さい。(室井記)

申込先 静岡市八幡本町5丁目9

杉本植物研究所

振替橋濱 13439 番